

これからずっと。

長谷川 利津子

初めまして、柳田邦男先生。

八月十日、私にとって忘れることの出来ない日になりました。二十三年間、心臓病を患いながら、何度も入退院を繰り返していた父が亡くなりました。昭和一桁生まれで、大変頑固な父でしたが、明るく朗らかな人でした。縫製業を営んでいたのもあってか、近くの公園へ散歩に行くのにも、ピシッとアイロンの効いたシャツをさらりと羽織って出かけていくようなとてもおしゃれな人でもありました。

そんな父に、小学生の頃の私は、布団に入ると、いつも「おはなしして。」とせがみました。そうすると父はいろいろな昔ばなしをしてくれました。「花さかじいさん」

「桃太郎」「浦島太郎」など。少しアレンジをして、おもしろおかしく話してくれました。

私はこのなんでもない父との時間が大好きでした。そんな思い出がふと蘇ります。

私には、四年生になる娘が一人います。

まだ、絵本の端っこをかじってグニャグニャにしてしまっ頃から、たくさんの絵本を読み聞かせしてきました。絵本の中には、いろんな世界が広がっていて、凄い力があります。子供のためにと読んでいたつもりが、読みすめていくうちに、いつの間にか、自分の方が絵本の世界に入り込み、いろいろな主人公に変身します。お姫様、魔女、時には恐竜にだって。

絵本の世界に吸い込まれていくような、なんとも言い難い、不思議な感覚を味わうことが出来ました。とにかく読んでいる自分自身が一番楽しんでいたのかもしれない。

せん。

今でも、病院の待合室で、絵本を手にとっては一緒に読んだり、役柄を決めて、交互に読んだりしては、娘と楽しんでいきます。

私が仕事で実家に娘を預けると、娘は学校で出る音読の宿題を私の父と母にいつも聞かせていました。すると父は、よくこんな事を言っていました。

ひな
「陽菜（娘の名前）は本を読むのが本当に上手だなあ。」

りっこ
陽菜が小さいうちから、利津子（私の名前）がいつも絵

本を読んでやってたもんなあ。あれは、凄く良いことらしいぞ。」と必ず、私と娘を誉めてくれました。私の小さい頃には、「こつやつて口に出して誉めてくれる父ではなかったの、この言葉が私にとって、一番大切な宝物に

なりました。

もう父は亡くなり、声を聞くこと、話しをすること、温もりを感じることは、もう出来なくなってしまうけれど、私の心の中にはいつまでも、「冗談を言いながら笑っている父がいます。そんな父を心を感じながら、これまたくさんの本と触れ合い心豊かな人生を送りたいと思います。」

私の今の率直な気持ちを書き、乱筆、乱文ですが書かせて頂きました。柳田邦男先生、読んで頂き本当にありがとうございます。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

子どもに読み聞かせをしている時、「読んでいる自分が一番楽しんでたのかもしれない」というのは、とても大事なポイントです。

子どもは、読んでくれているお母さんやお父さんが、本気で読

自分の子に絵本の読み聞かせることをやっているでしょう。

んでいるのか、一緒に楽しんでいるのか、物語に共感して感情をこめて読んでいるのかななどを、無意識のうちに感じ取っているのです。早く読み終えて寝かしつけようなどと、親が自分の都合に合わせて読んでいると、子どもはそれを直感的に見抜いてしまい、自分の気持ちも盛り上がってきません。

読み聞かせは、時間、空間、肉声、スキンシップ、感情の動きなどを親子が共有し合うことで、子どもにとっては現実体験に等しいと言えるほど大きな影響力をもつものなのです。親はそのことをしっかりと意識して、読み聞かせをしてほしいですね。

また、長谷川さんの心の中に、お父さんが寝る前に昔話をしてくださったことが、心の中で生きていて、それが今、わが子への読み聞かせにつながっているというのも、大事なポイントです。そういうのを、家族の文化の継承と、私は名づけています。きっとお子さんはやがて親になった時、誰かに言われるまでもなく、